

「北国街道のここに初めて橋が架けられたのは江戸時代で、舟を並べて板を渡した舟橋で、出水の時は橋板を増し普段は橋板を減らし、橋板を架けたり外したりしたのでかけ橋（梯）と名付けられた。昭和十二年に当時としては珍しいアーチ式鉄筋コンクリート橋が架けられ、アーチが川面に映った優雅で美しい姿から「たいこ橋」の愛称で市民に親しまれていた。」とある。

「小松市災異誌」の昭和八年七月二十四～二十六日の記録には台風豪雨により梯川のほとんどの橋が流されたと記され、併載の北国新聞の「流出直前の梯大橋」には将に流されようとする木造の橋が写っている。

昭和十三年三月の「土木学会誌」に、「梯大橋災害復旧工事概要」という工事報告がある。当時は国道十二号として県が管理しており、橋長七十四・五m、有効幅員四・五五mとあり、橋の形式選定に当たる制限事項として、

- ①海が近いので潮風を考慮し鋼材を避ける。
- ②流水の関係から中央径間を長径間とする。

奨励賞

たいこばしのはなし

土居原町 神田 博行

小松城二の丸の御門を移築したことで知られる来生寺の脇から茶屋町へと、梯川を跨ぐ梯大橋は、袂の案内板に依れば、

③ 洪水位高く、取付け道路に制限がある。
④ 地盤が堅固でない。(粘土・砂交じり)
⑤ 相当景観の美を要すること。
⑥ 将来の維持修繕費を少なくすること。
の六項目が記されている。図面を見ると、全体を左右対称の五つの径間に割り、流水路を跨ぐ中央は広く支間長二十m、その両側にそれぞれ十六mの三連アーチとし、土堤の上は九・五mの桁橋となっている。下路式単純ローゼ橋と言うアーチ構造である。下路式というのは、道路面が橋の主要構造部材よりも下にあるという橋梁専門用語である。またローゼ橋というのはアーチ部材に相当の荷重を負担させるためアーチが太い構造である。

海から三km以上離れたところで潮風を考慮して鋼材を避けたというのはこじつけだろう。事実、この災害を受けて昭和九年から十年にかけて架けられたすぐ下流の新梯大橋(旧の小松大橋)は、ゲルバー式鋼桁という誠に単純な鋼構造であった。

この梯大橋に先駆けて、昭和十年に長野県の本曾福島の長良川に大手橋と言う世界最初の下路式鉄筋コンクリートローゼ橋が架けられ、今も現役である。設計をしたの

は二十九才の長野県技師中島武である。別の土木学会の資料には、大手橋は既にアーチ材に鋼材を用いる計画だったが、戦時体制による鋼材不足のため、設計し直し、鉄筋コンクリートで架けることにしたことが記録されている。

石川県の若い技術者達もこの新技術に果敢に挑戦したのは明らかである。電子計算機の無かった当時、構造計算の手間を惜しむだけでなく、北国街道の梯大橋という名に相応しいランドマークとしての芸術品を造ると言う意識が高かったことが窺える。先の学会誌には、アーチ形状を決めるに当たっては幾つかの側面図を描き、計算と修正を繰り返し、アーチの高さを支間長の五分の一とすることに美観上の確信を得たと記されている。中央のアーチの高さは四m、両脇のアーチは高さが三・二mである。文末に設計越田嘉一、監督越田嘉一、加藤義之と記されている。工事の段階毎に逐一構造計算を重ねて、安全を確認しつつ進めていったものと思う。金沢大学工学部の前身、金沢高等工業専門学校の昭和四年の卒業生の中に越田嘉一の名がある。

橋の完成後、ここは小松市道となった。

金沢まで鉄道で通っていた頃、朝日に照らされた姿や、夕日を背景にしたシルエツトを眺めた。小学生の頃このアーチを上ろうとしたが、手すりも何も無く怖くて途中で引き返した。随分と大胆なことをしたものだが、この一回だけの大冒険が心に強く残っている。

川の拡幅改修のため平成六年に現在の百十七・四mの橋が架けられ、たいこ橋は撤去された。新橋は単純鋼鉄桁三連橋という上路式の構造で、道路面が高くなったため取付け道路の勾配は急となり、両側のまちなみには北国街道の面影は少しも残っていない。

土木構造物はその性質上ほとんどが多額の税金で造られているが、その中に絵心や歌心をかき立てるような、或いはそこに暮らす人々の心の癒やしとなるような印象深い構造美を見せるものがどれほどあるだろうか。都市工学を学ぶ若者の中には土木よりも建築を目指す者が多いと聞く。個人的な公共建築物に出会ったりするに付け、先人の労苦を思うとなんと寂しい気持ちになるのである。

思い出のよすがが一つある。大川町側の

橋の袂に、アーチの碇着部が当時のまま保存展示されている。そのアーチ部材を計ってみたら、幅は四十五cm、子供の時には十分広く見えた。「梯大橋の技術モニュメント」と記された解説書には、平成九年の日付と、大学の恩師で、その後の仕事上でもお世話になった、故小堀為雄先生の名前とともに、桜の季節の美しい「たいこばし」が写っている。